

## 「古典派経済学」の意味

1970 年代半ばごろから、New Classical economist と自称する経済学者が目立ってきた。New Classical は、今世紀はじめの文献にすでに見られる neo-classical 新古典派とは異なる概念である。ところが近年わが国では、New Classical の用語が新古典派と訳されるようになり、neo-classical と New Classical の違いが見えなくなってしまった。New Classical とは、経済がつねにワルラス均衡にあるという見方を指す。それは、まだ多数の支持を得るに至っていない。この見方に反する証拠と思われる経済現象の観察もある。これに対して neo-classical は、長いあいだにわたってさまざまな批判に耐えた、経済分析の有力な方法を指す。両者を混同し、疑問の多い New Classical の立場を否定することによって、同時に neo-classical の立場を否定してしまえば、経済学の健全な発達を妨げることになる。

### 1 マルクスとケインズにおける古典派の概念

「古典派」の用語の起源から考えよう。『雇用、利子および貨幣の一般理論』の冒頭でケインズは古典派の意味について述べ、この用語を初めて用いたのはマルクスであるという。実際、マルクス『資本論』に、klassische politische Oekonomie または klassische bürgerliche politische Oekonomie の用語がある。

マルクスが求める経済学成立の要件を 3 点に要約することができる (1) 探求が事実観察から出発する (2) 発達した資本主義経済を対象とする (3) 階級対立の本質を問う。マルクスに先行し、これらの要件を満しながら「ブルジョワの視野に留まる」経済学をマルクスは「古典派経済学」と呼び、リカードをその典型とする。『資本論』は、不完全な労働価値論に基づくリカード体系の完成と見られている。

ケインズは、マルクスと同様に、リカードを基準としながら、その追従者をも「古典派」に含める。そして、リカード経済学を「受容し完成した」経済学者の例として、J. S. ミル、マーシャル、エッジワース、ピグーの名を挙げる。『一般理論』第 2 章の所論から分かるように、ケインズにおける「古典派」の本質は、国民所得の量の決定ではなく、その分配の決定を主要な問題とし、セイ法則を前提とするところにある。『一般理論』それを覆すものであるとケインズはいう。

### 2 シュンペーターの classical situation

シュンペーターには「古典的情况 classical situation」の概念がある。その意味は、経済学の発展についての見方に基づいて理解される。経済学の歴史を見ると、多様な学説が乱立して論争の盛んな時代と、その論争が収まり、大多数の経済学者のあいだに合意が成り立つ時代とが交互に訪れるとシュンペーターはいう。古典的情况とは、論争が収まり、合意が形成された状況のことである。

シュンペーターは、その意味での古典時代がこれまでに 3 度あったといい、それぞれの時代を代表する著作を挙げる。第 1 の古典時代はアダム・スミスの『国富論』、第 2 の古典時代は J. S. ミルの『経済学原理』 *Principles of Political Economy*、第 3 の古典時代はマーシャルの『経済学原理』 *Principles of Economics* である。シュンペーターの所論から外捜して、1960 年代を第 4 の古典時代とすれば、その時代を代表する著作はサミュエルソンの『経済学』 *Economics* とな

るであろう。

これらの古典時代のあいだには、類似と相違とがある。どの時代の経済学も、資本主義市場経済における価値と分配の理論および経済変動の理論を中核とする。一方、時代が経つにつれて、経済学の専門化、数理化が進んだ。また人口増加と収穫逓減、所得と富の分配の不平等、資本主義経済の停滞、資源不足とインフレーションなど時代特有の問題が、古典的秩序を乱しては、また新しい秩序を形作って行った。

### 3 新古典派 neo-classical および新古典派総合

新古典的 neo-classical とは、シュンペーターの見方にしたがえば、第 3 の古典時代の経済学を指す。いわゆる限界革命以後の経済学である。経済学の歴史をどのように見るとしても、1870 年代を一つの転期としなければならないであろう。

neo-classical の早期の用例は、ヴェブレンおよびドップにある。ヴェブレンは、マーシャルの経済学を指して neo-classical といった。快楽主義的な個人観、目的論的な社会観をイギリス古典と共有するという見方である。一方ドップは、やはりマーシャルを念頭に置き、個人主義、微分計算、効用最大化原理を強調した。

ヴェブレンの hedonistic と teleological, ドップの individualistic には、少なくとも今日の neo-classical を表現する言葉としては語弊がある。hedonistic と individualistic は明らかに不適切であり、teleological は、新古典派の一面を指すに過ぎない。限界革命以後の経済学を、価格と資源配分の理論に限って、その特徴を適切にいい表せば、方法論的個人主義、効用最大化原理、均衡分析となる。

ケインズ『一般理論』を吸収した新古典派総合の下で、価格と資源配分の理論は、方法論的個人主義、効用最大化原理を維持しつつ、均衡概念を顕著に拡張した。そこで均衡とは、ワルラス均衡のことだけではない。裏切られる予想、非自発失業など、ケインズの世界を受容する工夫ができる。本質的に同じ分析装置を用いて、事実に関する前提の相違にしたがって、ときにワルラスの世界が、ときにケインズの世界が解かれるというのが新古典派総合の意味である。

限界革命は、価格と資源配分の問題領域に起こった出来事である。少し遅れて、集計量による経済動学の理論にも進展があった。その豊かな遺産を新古典派のものとししないのは不当である。経済動学の進展には、限界革命の影響が顕著に見られるからである。逆に『一般理論』の均衡静学も、経済動学から出たと見ることが出来る。

新古典理論に問題がない訳ではない。価格調整の理論は、まだほとんど成功していないといわなければならない。また、方法論的個人主義が、経済分析の採るべき唯一の立場かという疑問もある。

### 4 New Classical 対 New Keynesian

「新しい古典派 New Classical」と「新しいケインズ派 New Keynesian」の出現は 1970 年代半ばのことである。前者は、ワルラス均衡を基本前提として、純粋にワルラスの世界の中で経済変動をも説明しようとする。後者は、価格調整の仕組みを探求し、ケインズの世界を成り立たせる価格硬直性の原因を模索している。

すべてをワルラス理論、あるいはその現代版であるアロウ、ドゥブルウ理論で割り切ろうとする「新しい古典派」の試みは無謀のように思われる。素朴な観察を通して、在庫変動の中に不均

衡の証拠が見出されるのではないか。また、非自発失業の証拠はないであろうか！「新しい古典派」はマネタリズムの伝統を汲む。しかしその経済学は、旧マネタリズムの経済学とはまったく異なるものである。このような「新しい古典派 New Classical」を否定することによって同時に「新古典派 neo-classical」を否定するのは、大きな誤りである。一見危い「新しい古典派」の立場も、それを科学的に否定するのは容易ではないことを付け加えておかなければならない。

新古典派の枠の中にある「新しいケインズ派」については、価格硬直性の問題を十分に解明していないという不満が多いであろう。その原因は「新しいケインズ派」の研究戦略にあるのか、あるいは新古典派自体の方法にあるのか、まだ不明である。

## 参考文献

Maurice Dobb (1923) “The Entrepreneur Myth.” *Economica* 4: 66–81.

John M. Keynes (1973) *The General Theory of Employment, Interest and Money*. London: Macmillan. (First publication, 1936)

Karl Marx (1953) *Das Kapital*. Buch I. Berlin: Dietz Verlag. (First publication of the third (Engels) edition, 1883)

Joseph A. Schumpeter (1954) *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press.

Thorstein B. Veblen (1900) “The Preconceptions of Economic Sciences III.” *Quarterly Journal of Economics* 13: 240–269.